
ポケットモンスターGLORIOUS TRACK

黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター GLORIOUS TRACK

【Nコード】

N4753R

【作者名】

黒

【あらすじ】

シンオウリーグチャンピオン、シロナ

彼女にはとあるパートナーが常に側にいた

これはかつて普通のトレーナーであった少年と少女が出会い、始まった物語の記録…

*かなり亀更新になると思われます
ぶっちゃけ副業みたいなもので…

ブローグ

「おい！見つかったか！？」

「ダメだ！ここにもいねえ！」

「こつちもダメ！」

沢山の人達が誰かを探して動き回っている

「おい！アイツ見つかったか！？」

「あ！オーバさん！…まだ手掛かりすら…」

「頼む！一刻も早く見つけてくれ！じゃないと…ゴヨウに…殺られる！」

『了解！』

「急げ！ゴヨウさんの事だ！絶対俺達まで殺られるぞ！」

「あの人だ！あの人を呼べ！エスパーポケモンが使える奴はあの人
の位置を掴んでテレポートだ！」

正に阿鼻叫喚。この場所でのゴヨウと言う人物の力が伺える光景で
ある

そんな中でオーバは

「確かにあの人なら…シロナを引きずってこれるな」
と呟いた

「リゾートエリア」

「ん…あ…」

《…父様？》

《父さん？》

「あ、いや…また誰かに呼ばれたような気が…」

《気のせいではないのですか？》

《きつと気のせいだよ。だから遊ぼうよ》

「…そうだな」

そう言って手持ちのポケモン…エーフィとブラッキーとじゃれ合う
この青年の名前はケイジ

…過去最強と呼ばれたシンオウリーグチャンピオン、シロナのパートナーであり、シロナが唯一、勝てなかった相手でもある

そんな彼はかつてこう呼ばれた

無冠の帝王、と

これは少年、ケイジとシロナの軌跡を描いた物語…

シンオウへく出逢いく（前書き）

どうも！黒と申します！

全くの駄文と思いますがよろしく願いします

ちなみに僕の小説の主人公の名前はケイジか司に統一するつもりです

それでは本編をどうぞ！

シンオウへく出逢い

ズズズズズズ...

「ん...」

もう朝か...

カチッ

「.....ZZZ」

「いや、起きろオオ！」

再び夢の世界に旅立とうとした時、突然布団が剥ぎ取られた

「...何すんだよリュウ」

俺の布団を奪ったコイツの名前はリュウ。

俺の一番の親友だ

「お前今日オーキド博士に呼ばれただろっ...さっさと行けっせ」

「.....あ」

「忘れてたのかよ...」

「ハッハッハ...ソナコトナイヨ？」

「嘘つけ。カタコトになってんぞ」

「まあ、そんな事は気にせずパッパと行こうか！」

「あ、オイ！」

この辺りで自己紹介でもしておこうか

俺の名前はケイジ

ここ、マサラに住んでいるトレーナーだ

…以上。短いとか言うな

ほら、研究所に着いたから時間無いんだよ

「どうしたケイジ？早く入ろうぜ」

「ああ、今行く」

さて、今度はどんな厄介事を押し付けられる事やら…

…仕事終わった後、そのまま旅をするのも良いかもしれない

（ここから三人称視点）

「博士」

「来たぞ爺さん」

「よく来たのう、リュウ、ケイジ」

「で？用事ってのは？またお使いか？」

ケイジが面倒くさそうに言う

どうやら過去に何度も手伝わされていたようだ

「いや、今回は違う。実はかなりややこしい事になってな…」

「ややこしい事？何があったんですか？」

「うむ。実はの…リュウにはホウエン地方に、ケイジにはシンオウ地方に行つて欲しいんじゃない」

「…は？」

突然のかなりの遠出の要請に一瞬耳を疑う二人

「待て。百歩譲つて行くでしょう。（つーか絶対行かされるんだろうけど）何で俺がシンオウでリュウがホウエンなんだ？」

「お前は既にポケモンを持っているがリュウは持つておらんじゃろ？ホウエンは割と交通技術が発達してあるからレベルが低いポケモンでも何とかなるが、シンオウは気候上そうはいかんのじゃ」

「…コイツ等もそんなにレベルは高くないぞ？」

「そこら辺は大丈夫じゃ。ただ、帰りまで手配が出来なかっただけ

じゃから」

「…はあ、わかりました。僕は行きます」

リュウはため息をつきながらもハウエンに行く意志を見せる

「おお、行つてくれるか。なら、リュウ。こっちのモンスターボールから一つを選べ。ワシが最近見つけた珍しいポケモンじゃ。この中から一匹をお主に譲ろう」

「じゃあ…コイツを」

リュウが選んだのはヒトカゲ

選んだと同時にリュウはヒトカゲをボールから出す

「…カゲ？」

ヒトカゲは何故自分がボールから出たのかわかっていないようのでキョトンとしている

「ヒトカゲ、これからよろしくな！」

「カゲ？…カゲ」

早くも意気投合しているリュウとヒトカゲ

「…ったく…爺さん。俺も行くぜ。」

「おお、そつか。ならお主も…」

オーキド博士はケイジにもポケモンを譲ろうとするが

「いや、いい。俺にはコイツ等がいるしな」

そう言っつてケイジもボールからポケモンを出す

「ファイ…」

「ブラッ？」

出てきたのはエーフィとブラッキー

この二匹はケイジがタマゴから孵して育てたポケモンで、つい先日進化したのだ

《父さん、本当にシンオウに行くの？》

「嫌か？」

《だって寒いんでしょ？ボク寒いのが苦手だよ…》

《ルナ、我が儘を言っつても始まりませんよ？》

「まあ…爺さんの頼みだからな…諦めろ、ルナ」

《…わかったよ》

この二匹、何故か普通のエーフィやブラッキーより数段強く、知らない間にケイジとの間のみテレパシーが通じるようになっていた

ちなみにエーフィがイブで、ブラッキーがルナである

「では早速行ってもらおうぞ。フーディン」

オーキド博士は二匹のフーディンをその場に出す

「え？ちょっと待って下さい。今から行くんですか？」

「時間がないからの」

ものすごい笑顔で言い切る博士。この人絶対楽しんでる

「じゃあ行くぞ〜」

「「「ちょ、待つ」「」」

「フーディン、テレポート」

「「このクソ爺がア」「」

ケイジ達の叫びはテレポートによって途中で遮られた

「さて…それぞれパートナーとなる者がいる場所には送った…後は運命が変わるのを待つだけ…」

本当にこれで良かったのかのう…

アルセウスよ」くケイジ視点く

「　　アア！って」

ドシーン

「　　いった！マジで痛っ！」

急に爺にシンオウに飛ばされたと思ったたらまさかの空中だった

「　　あの爺…帰ったら覚えてろ…！」

俺が爺に密かな復讐をするのを決意していると、上から手紙らしき物が落ちて来た

「　　なんだコレ…」とりあえずそこはシンオウのカンナギタウンと言う場所の近くじゃ。まずはそのの考古学者のハクと言う者を訪ねて

くれ。その後の事はハクの指示に従って欲しい。』」

…しゃあない。行くしかないな

正直見知らぬ土地で勝手に行動して大丈夫だとは思ってないので、指示に従う事にした

くカナギタウンく

村の人達にハクと言う人の家を聞いてまっすぐ向かっていたのだが…

「…迷った」

迷った。それはもう速攻で。

こういう時に自分の方向オンチさに泣きそうになる

…そう考えたら良くカナギタウンに着けたな、俺

早くハクさんの家に行って休ませてもらいたい

そんな事を考えてキヨロキヨロ周りを見回していると…

「…どうしたの？何か探し物？」

女の子が俺に話しかけてきた

長い金髪に黒い服を着た恐らく世間的に綺麗と呼ばれるであろう女の子だったが、唐変木、鈍感王、その他諸々の称号を持っていた俺

事になるわね」

「そうだったのか。…じゃあよろしく頼むよ。えっと…」

「そついえば自己紹介がまだだったわね。私はシロナよ」

「俺はケイジだ。よろしく」

これが、俺が唯一背中を任せられる存在になるシロナとの出逢いだ
った

旅立ち〜狸爺の陰謀〜（前書き）

テスト休みを満喫中の黒です！

もしかしたら今日は連続投稿するかもです

空の軌跡のセーブデータが消えてしまったので…

それでは本編をどうぞ！

旅立ち〜狸爺の陰謀〜

〜ハクの家〜

「…という訳で、オーキド博士にあなたの指示を聞いて動くように言われて来ました」

あの後、シロナに家まで案内してもらい、とりあえずは目的を達成した

今はハクさんに事情を説明して指示をもらおうとしている所だったりする

「成る程、遠路はるばるご苦労だったの」

「いえ、一瞬でしたから」

「？」

ちよこんと小さい子のように首を傾げるシロナ

「気にすんなシロナ。つーか気にしないでくれ」

「うん…?」

「…お主も苦労しているよじじい」

「…はい」

ハクさんが憐れみの目で俺を見る

…言い返せないのが物凄く悲しい

「それでは…まずはお主の手持ちを見せてくれるかの」

さっきまでのほのぼのした感じを捨て、急に真面目な顔になるハクさん

その言葉に、特に拒む理由も無いので、俺は手持ちのポケモンを全て出す

出てきたのは…ピカチュウ、ガーディ、エーフィ、ブラッキーの四匹。

ハクさんは俺のポケモンを鋭い目で見ると…

「…うむ、大丈夫そうじゃの。ポケモンに邪気を感じなければ、怯えた様子もない。お主自身からも邪気は感じぬからの」

「はあ…」

正直ハクさんが何を言っているのかわからなかったし、何が大丈夫なのかもわからなかった

しかし、ハクさんはさらに爆弾を投下した

「それでは…」

孫を頼んだぞ」

「「……………はぁ!?!?」「」

「ちょ、ハクさん!?!?」

「おおおばあちゃん!?!?頼むってなな何を!?!?」

シロナが異常に驚いている。…俺は爺さんの所為で少し耐性がついていたので、そこまで取り乱さずにすんだ

「む?シロナはともかく…お主は何も聞いておらんのか?」

「聞いてません。

…まさか」

「うむ。オーキドには知らせてくれと頼んだはずなのじゃが…」

あのクソ爺…

「すみません、ちょっとテレビ電話借ります」

「構わんが……」

「……………」プシュー……

何故かシロナがオーバーヒートしているがとりあえずスルーする

「もしもし、爺か？」

『おお、ケイジか！無事にシンオウに着いたみたいじゃの』

「ああ……。けど今はそれはいい。……何か俺に言う事無いのか？」

『はて……？とんと見当がつかんが……』

このクソ爺……口元が笑ってんじゃねえか！

「ふざけんな！あんたお願いの内容隠してたじゃねえか！」

『……だつて教えてたらお主断つたじゃろ？』

「ケースバイケースだ！勝手に決めんな！」

『悪かった！悪かったから……何とか受けてくれんか？』

……はあ、つたく俺が爺のお願いを断らないの知っててこんな事するからな……

「……今回だけな」

これも言ったの何回目だ？

『…ありがとうな、ケイジ』

「最初から普通に頼めやクソ爺」

…俺は口でこそここまで反抗しているが、元から爺さんの頼みは断る気はない

爺さんには返しきれない恩があるから…

「話はずいたかの？」

電話を切ってハクさんとシロナがいる部屋に戻ると、心配だったのか、ハクさんが席を立てていた

ちなみにシロナはさすがにオーバーヒートからは立ち直ってたが、顔が真っ赤だった

「…はい。俺で良ければ受けさせて頂きます」

「おお！そうかそうか！」

「……………//」

めっちゃ嬉しそうなハクさんとめっちゃ恥ずかしそうなシロナ

「……………いいの？」

突然シロナが上目遣いで俺の顔を覗き込んでくる

「ん？ああ。俺は別にいい。どうせ爺さんの頼み事が終わったら暫く旅する予定だったしな」

「…そっか」

「ああ…これからよろしくな？」

「うん！」

どうやらシロナは見た目に反して案外子供っぽいようだ。ルナとい
い勝負か？

「む。今何か失礼な事考えたでしょ」

「イヤ？ソナコトナイヨー」

…女の勘って怖い

「ケイジくん、シロナをよろしく頼む。本当は一人で旅させたかったのだが、こやつは子供っぽさが抜けなくてな…放っておくと何に巻き込まれるかわからなくての…」

「…なんかわかる気はします」

「あー！二人共どついう意味よ！」

ほっぺたを膨らませて怒るシロナ…そついう所だよ

「「あつはつはつは！」」

「む〜！」

その日は、暫くシロナとハクさんと話をしてから休んだ

俺はポケモンセンターに泊まるつもりだったが、明日からどうせ一緒に寝るんだからと半ば強制的に泊められた

どうでもいいが、その言い方は色々まずいと思う

〜翌日〜

「じゃあ行つてきます！おばあちゃん！」

「うむ、気をつけての…ケイジを他の娘に取られんようにの（ボンッ）」

「!?!?な、にやにを言つてんのよ!！」

「はっはっは！ワシがわからんと思うてか！態度と目を見ればすぐわかつたわい！」

「もう…////」

「…?何の話？」

「何でもないの!////」

…?まあいいか

「それじゃあ…もう本当に行くからね？」

「うむ。道中気をつけての。いつでも帰ってくるんじゃないぞ？」

「うんー！」

そうやって俺とシロナはカンナギタウンを後にした

「…本当に良かったのか？」

「うん…いつかは旅に出たいと思っていたから…」

少し泣きそうになっているシロナ

「そうか…」

俺はそれ以上はその事については何も聞かなかった

「…それでこれからどうするの？」

暫くしてから立ち直ったシロナがそう言ってきた

「ん…お前の旅だし、お前が決めた所でいいんじゃないか？」

「もう！私だけの旅じゃ無いんだよ？“私達”の旅でしょ？」

その言葉に少し思考が止まった

けど

「クツ…アハハハハ！」

「へ？何？何で笑ってるの？」

「いや…お前の言う通りだと思ってな」

「でしよ〜！」

何故か威張って言うシロナにまた笑ってしまった

「む〜！何で笑うのよ〜！」

「いや…子供だなくって！」

「子供じゃないもん！」

「それが子供なんだよ」

シロナが怒って膨らませた頬を指でつつくと、空気が抜けた音と共にシロナの頬がしぼむ

「〜／／／！バカバカバカバカ！」

顔を真っ赤にしてポカポカと俺の背中を叩くシロナ

…今回ばかりは爺さんに感謝かな。

楽しい旅になりそうだ

初めてのバトル〜ケイジの実力〜

カンナギタウンを出て早くも三日が過ぎた

「フカマル！ひっかく！」

「フッカー！」

「マネー！？」

フカマルのひっかく攻撃がマネネを吹き飛ばす

マネネはそのまま目を回して動かなくなった

「やった！ナイスフカマル！」

「フカ〜」

戦闘が終わると同時にフカマルを抱き上げて頬ずりするシロナ

…フカマルってりくざめポケモンだよな？ウロコとか大丈夫なのか？

そんな事を思ったがフカマルは嬉しそうなのでスルーした

「それにしても、まだトレーナーと一回も会ってないよね？」

「そうだな」

そう、未だにトレーナーを見ていないのだ。一回も

「まあ、その内嫌でも会うんじゃない？」

「そうかな？」

「そのカップル！」

噂をすればなんとやら、早速失礼な（シロナに）間違いをした俗にラブラブカップルと呼ばれる類のトレーナーがよって来た

「え？カップル？／＼（そんな…まだ早い…でもそんな風に見えるのかな？）」

「カップルじゃねえ。男女のペアを見たら何でもカップルに見んなアホが」

「……………」orz

「…ん？どうしたシロナ？」

「…何でもない（そんなバツサリ否定しなくても…）」

後ろでシロナが激しく落ち込んでいたが、本人が大丈夫だと言っの
で置いといた

「ここはカップル同士でバトルしない？」

「聞いてねーよコイツ等。だからカップルじゃねえって」

「……………」orz

「私達のコンビネーションに勝てるかな？」

「…もういい。あなた達…絶対潰す！行くわよケイジ！」

「お、おお」

何か突然復活したと思ったたら般若もビックリなオーラを背負っていためっちゃ気圧されたが、これは俺は悪くない…はず

「勝負は一人二匹持ちの二対二！どちらか一匹でも残ってた方の勝ちだ！」

「わかった」

「いけっ！プラスル！」

「行くわよ！マイナン！」

プラスルとマイナンか…またダブルバトルの鉄板持って来やがって

「出番よ！フカマル！」

「ピカ、頼んだ」

こっちはシロナの手持ちの中でも主力のフカマルとピカをだした

「プラスル」

「マイナン」

「てだすけ！」

…バカだコイツ等。てだすけの効果知らないのか？

てだすけはそのターンのパートナーの技の威力を上げる技。つまり同時に出したら効果は…ない

「フカマル！マイナンにマッドショット！」

「ピカ、てだすけ」

てだすけの効果に乗せたマッドショットがマイナンにヒットするが、案外レベルが高かったのか持ちこたえられた

「ええ！？なんで！？効果バツグンのはずなのに！」

「落ち着け。相性で勝負が決まる訳じゃないんだ。ピカチュウがイワークに無傷で勝つ事もあるんだからな」

うん、あれはびびった。レッドのやつ、ひたすら電光石火 高速移動 影分身のコンボだもん。タケシさん半泣きだったし…攻撃当たらない、速すぎて防げない、避けられないだからな…

「相性はいいんだ。どんどん攻めていけ！」

「うん！」

うん、素直な子はお兄さん嫌いじゃないよ

そして律儀に待っていてくれた奴らに向き合う

「待たせて悪かったな」

「いやいや、痴話喧嘩は終わったかい？」

「私達の前で見せつけるなんてやるわね！」

「いや、違うから！」

痴話喧嘩した覚えも見せつけた覚えもない！っーか見せつけるって何をだ！

「まあいいか！再開だ！」

「いや、聞けエエエ！」

何だ？コイツ等の耳はあれか、俺の言葉だけ遮断すんのか？

「プラスル、ピカチュウに電光石火！」

「マイナン、こっちもよ！」

「影分身！」

ピカの影分身でプラスルとマイナンの攻撃は外れた

「フカマル！マッドショット！」

「「避けて！」」

そこにすかさずフカマルがマッドショットを繰り出す、二度目と言ふ事もあり、かわされる

「ピカ！地面にアイアンテール！」

「ピッカツ！」

アイアンテールの衝撃で砂煙が四匹を隠す

「くっ！プラスル、脱出しろ！」

「スパーク！」

プラスルが砂煙から抜け出した瞬間にスパークが炸裂した。しかも追加効果でマヒまでしている

「かわらわり！」

マヒで素早さが落ちた所でピカの一撃がヒットし、プラスルは戦闘不能になる

「くっ！」

「ピカ、よくやった」

「ピカ」

「まだまだよ…行け！ポニータ！」

（シロナ視点）

あ、ケイジの方決まっちゃった…でも…

「マイナン！電光石火！」

「マイツ！」

「っ！フカマル！砂嵐！」

さっきから一回も攻撃できてない…何とかフカマルの砂嵐でこっちも攻撃は当たってないけど…

「フカマル、ひっかく！」

「かわして電光石火！」

「フカ〜！」

「フカマル！」

ついにフカマルにダメージが入った

どうしよう…このままじゃ…

「な〜に焦ってんだ？」

突然ケイジが隣にやって来た。ピカも一緒に

…けどピカは一切戦つ気無いわね。ケイジの頭に乗ってくつろいでるし

「ケイジ…あつちは？」

「終わった」

「…へ？」

さっきケイジが戦っていた場所に目を向けるとポニータが目を回して、しかも痺れていた

「まあ、気にすんな。こつちに集中しろ」

「う、うん」

再びフカマルに目を向けると、ちょうど砂嵐の効果が切れた

「今よマイナン！電光石火！」

「フカマル！かわしてマッドショット！」

マイナンの攻撃をかわしてマッドショットを繰り出したフカマルだったが、あっさりかわされてまた振り出しに戻る

「うっ…」

「だから何を焦ってたよ」

「え？」

私は別に…

「何でさっきから“一撃KO”ばかり狙ってんだ？」

「！」

言われて見れば…私はさっきからマッドショットで相手を倒す事ばかり考えていた

当たらないのに何度も何度も…

「相手の戦い方はヒット&アウェイ。そんな一発狙いの戦い方じゃ徐々に体力を削られるのがオチだ。後はわかるよな？」

「…うん！」

そうやって喋っている間にもフカマルは攻撃を避け続けてくれた

後は私とフカマルで反撃するだけ！

「フカマル！砂嵐！」

「フカ！」

再び砂嵐が吹き荒れる

それに隠れて…

「フカマル！どろかけ！」

「フカツ！」

「マイ！？」

どろかけは攻撃と一緒に相手の命中も下げる技。しかも攻撃速度も早いから当たりやすい

「そこから乱れひっかき！」

「くっ！マイナン！電光石火よ！」

「かわして隠れて！」

マイナンが苦し紛れに電光石火で攻撃してきたけど、どろかけのせいで前を見れないのか簡単にかわせた

それに乗じて再びフカマルは隠れる

「もう一回どろかけ！」

「かわして！」

「マイ…マイナ！？」

「マイナン！」

無理よ。砂嵐でフカマルが見えないのに加えてどろかけで前が見えないもの

「フカマル、トドメよ！切り裂く！」

フカマルにそう指示した瞬間、砂嵐が収まる

「！今よマイナン！全力で電光石火！」

「フカアア！」

「マイイイ！」

両方がぶつかって吹き飛ばされる

「フカマル！」

「マイナン！」

「フカ〜…」

「マイ〜…」

「両者戦闘不能。さて、次に行こう。フカマルとマイナンのためにもな。二匹の治療は俺がやっておく」

「そつね…行きなさい！ポニータ！」

「勝つわよ！リオル！」

向こうの二匹目はポニータ、こっちはリオル

「先手必勝！ポニータ！火の粉よ！」

「リオル、かわしてはっけい！」

リオルのはっけいがポニータに直撃する。ただどこっちも少し火の粉がかすってしまった

「くっ！まだよ！飛び跳ねる！」

「っ！かわして！」

「リオツ！……」

リオルはかわしきれずに飛び跳ねるの直撃を食らってしまった

「リオル！大丈夫！？」

「リ……リオツ！」

まだまだ！と言うように力強く返事するリオル

まだまだこれからよ！

くケイジ視点

《父様：手助けしなくてもいいのですか？》

ボールに入ったままのイブが言ってくる

《そうだよ。ボク達が手伝えばきつと勝てるよ？》

「それじゃあダメだ」

《何で?》

「俺達が始めて勝った時、誰かに手伝ってもらったか?」

俺は話しながらフカマルとマイナンを治療し続ける

《それは…》

《でも、今回は分が悪すぎます。リオルは生まれてあまり間がないのですよ?》

そう、リオルは生まれてからまだ二日しか経っていない。必然的にレベルも低い

しかし…

「それを差し引いてもあいつには“あの技”があるだろ?…よし、終わった」

治療を終えてシロナの方に目をやる

リオルが飛び跳ねるの直撃を受けた所だった

《…なるほど、あの技ですか…》

《確かにあれならなんとかなるかもだね》

イブとルナが納得する

「まあ、もしシロナとリオルが負けたらお前らの出番もあるからな？ピカはもうやる気ないし、ガーディに至っては寝てるし」

《やった〜！じゃあ次ボクが出る！》

《ダメです！私が出ます！》

《え〜！》

《この前トレーナー戦のフルバトルで途中で交代って約束してたのに6タテしたの誰でしたっけ？》

《うっ…わかったよお…》

どうやら今回はイブの勝ちのようだ

「おっ…そろそろくるぞ。あれが」

「ポニータ！体当たり！」

迫るポニータ

しかし

「リオル…」

起死回生よ！

「リオオオオオ！！」

瞬間、リオルの体が青白く光り、ポニータにクロスカウンター気味に起死回生が決まる

ポニータはそのまま崩れ落ち、完全に伸びていた

《出番無かったね、イブ》

《うるさいです。ルナ》

イブとルナは何時も通りとして…

ま、よくやった方だな

「やった…やった〜！さっすがリオル！！」

「リオ〜！」

シロナはリオルと一緒に飛び跳ねて喜んでいる

「お疲れ様。頑張ったな」

「あ！ケイジ！勝ったよ！始めて勝った！」

相手のトレーナーに治療したマイナンを預けてからシロナの所に行くど、よっぽど嬉しかったのか抱きついてきた

「ちよ、おまつ」

「やった！やった！」

「ちよ、回るな！飛ぶな！任せるな〜！」

離れたと思ったら俺の手を握り、飛びながら俺の周りを回って、そのままハンマー投げみたいな感じになる

待て待て待て！遠心力！遠心力ヤバいから！

「やった〜」

…まあ、偶にはいいか。頑張ったしな

シロナの笑顔を見ると、不思議と怒りは湧かなかった

キャラ設定

・主人公

ケイジ

年齢：17歳

手持ちポケモン

・イブ（エーフィ）

・ルナ（ブラッキー）

・ピカ（ピカチュウ）

・ガーディ

・容姿

黒髪に朱い目。髪はTODのスタンみたいな感じ。若干ツリ目気味だが、怖がられるとかはない

・好きな物

甘味、自分のポケモン、友達、睡眠

・嫌いな物

理想主義者（理想だけ言って行動しない奴）、ロケット団系統、シロナの料理、^{トロッコマ}安眠の妨害

今作の主人公。幼い頃からマサラで育った。イブとルナは、ケイジが物心がついた頃にどこからか拾ってきたタマゴから生まれたため、テレパシーで会話が出来る。（イブがいるから）

過去にレッド（初代黄）の旅に付いて行った事もあり、実力は十分あり、レッドが唯一勝てない相手でもある

常に物事を冷静に見ていて、滅多な事では熱くならない

但し恋愛事には鈍感で、相当努力しなければ絶対に気付かない

トキワのトレーナースクールの女子全振り（本人知らず）の記録を持っている

睡眠大好きで隙あらば寝ている

オーキド博士に何かしらの恩がある

・ヒロイン

シロナ

年齢：16歳

手持ちポケモン

・フカマル

・リオル

容姿：原作通りで、ちょっと幼いくらい

・好きな物

ポケモン、美味しい物、可愛い物、ケイジ

・嫌いな物

ポケモンを大事にしない人、意地の悪い人、他人を傷つける人

今作の（多分）ヒロイン。

原作通り、カンナギタウンで育った。

純真無垢、天真爛漫：と言えば聞こえはいいが、ハクが一人で旅に出すのを躊躇う程の世間知らずで、精神年齢が子供。

ただ、出会ったばかりのケイジに一目惚れ（？）するなど、ちゃんと年頃の女の子っぽい所もあった様子

原作でチャンピオンになっている通り、バトルのセンスはかなりの物で、バトルをする度に何かを学ぶ程の成長速度を見せる

見た目は綺麗な女の子なのに、中身は無邪気なので、見た目と中身のギャップに啞然とする人は多い

最近の悩みはケイジに好意を受け取ってもらえない事らしい

リュウ

・年齢：17歳

容姿

ポケモンエメラルドの男主

手持ちポケモン

・ヒトカゲ

ケイジと一緒にオーキド博士に飛ばされた少年

礼儀正しい、優しい、物腰柔らか、成績優秀、スポーツ万能と言う
完璧超人

しかし意志が弱い所があり、人に流された挙げ句、諦めると言う事
もしばしばあった

ホウエンでパートナーに会ったようだが…？

・身長について

リュウを基準として170とします

ケイジ：178

リュウ：170

レッド：174

シロナ：156

です！

この後に出てくるキャラはその都度身長を載せます

大都会へ〜天敵登場?〜（前書き）

明日くらいからまた空の軌跡の方が更新できそうです！

良ければ、そっちの方も見てみて下さい！

三好八人衆さん、ご指摘ありがとうございました！

これからもよろしく願います

大都会へ〜天敵登場?〜

あのバトルからまた数日…

「フカマル！切り裂くよ！」

「フツカアアア！」

「ゲロオ！？」

「ああ！グレッグル！」

「…グレッグル、戦闘不能。この勝負、シロナの勝ちだ」

あれからシロナは負け知らずだ

自信もかなり付いた…いや、付きすぎた

今シロナは初心者トレーナーがよく嵌る罠にがつつりかかっている

“自分は強い。負けるはずがない”と言う思い込みに

だからズイタウンに寄らずにそのままトバリシティに行こう、なんて言い出したんだろう

…あわよくば、ジムリーダーがシロナをあっさり負かしてくれればいいな〜と思います

…あれ？作文？

「お〜い！ケイジ〜！早く行こ〜よ〜！」

気付いたらシロナに結構遠くまで離されていたようだ

早足でシロナに追い付き…

「ったく…そんなに急いだら早く年とるぞ？」

「えっ！？嘘っ！？」

「嘘」

本気でビックリしていたシロナにあっさり嘘と教える

「~~~~~！！」

「アッハツハ」

「ツ！バカ！」

真っ赤になったシロナに思わず笑ってしまつと、恥ずかしかったのか、そっぽを向いて拗ねてしまった

「クク…わかつたわかつた。悪かつたつて」

「…もうしない？」

ちよつと涙目になってこつちを見上げるシロナ

「しないしない」

「…なら、許してあげる」

そう言っつてそのまま腕に抱きついてくるシロナ

「？何だ？」

「罰ゲーム。トバリシティに着くまでこのままね」

「…何だそりゃ？」

まあ、特に支障も無いのでそのまま進んだ

「フカマル！ドラゴンクロー！」

「ワンリキー！…くそ、強いな、君」

「ありがとう あなたもなかなか強かったわよ」

笑顔で相手と話すシロナ

そんな事したら…

「あ、ありがとう…//」

はい、オチた。

あいつ自分の容姿自覚しろよな

《それを父様が言いますか》

《全くだよ》

「…イブ、勝手に心を読むな」

《嫌です。エスパーポケモンの特権ですから》

「…それと俺は自分の容姿くらい自覚してるぞ？」

《《はあ…》》

イブとルナ…それとピカとガーディにまでため息をつかれたような気がする

《じゃあ自分の容姿を言ってみてよ》

「…？別にごく普通だろ？」

《なら周りはみんな普通以下ですね》

「へ？」

再びため息をつくイブ達

訳が分からなくなって来たのでとりあえず置いておく

「…で？いつまでひっついてるつもりだ？」

「トバリシティに着くまでって言ったでしょ？」

「…そろそろ精神的にツライんだけど」

「ダメ」

「…いや、マジでキツイです。」

この道は修業の名所らしく、トレーナーには空手家が多い

…つまり、ほぼ男しかない

そんな所に自分達と変わらない普通の顔した男が見た目綺麗な女の子に抱きつかれた状態で来てみる。そりゃあム力つきますよ。睨みますよ。俺なら間違いなく幸せクラッシュするしな

「さあ、どんどん行くわよ！」

「フカ」

「ちよ、オイ！引つ張んな！」

俺はシロナに腕を掴まれたまま、どんどん引つ張られて行った

…不幸だ…（泣）

トバリシティ

「わ〜…ここがトバリシティかあ…」

「……………」

…無理だ。もう喋る気力もない

もう今日はさっさとポケモンセンターに行って寝よう。そうしよう

そう決めて俺はポケモンセンターに向かおうとしたが…

ガシッ

後ろから肩をがっしり掴まれ、動けなくなった

大体予想は付いているが、サビたロボットのようにつっくり後ろを振り返ってみると…

「ケイジ！一緒にデパートに行こ！」

目をキラキラさせた我らがシロナ様がいらっしやった

ああ…犬耳と尻尾が見える…

でもここで断ったら間違いなく途中でぶっ倒れる…

そう思った俺は断ろうと決心し…

「悪いシロナ、俺疲れ…」さあ、行くわよ〜」「…（泣）」「

やはり無理やり連行される俺。気分は警察に連れていかれる犯罪者

…拝啓、オーキドの爺さん

俺に平穏な時間は暫く来ないみたいです…

「あゝ、楽しかった！」

「…さいですか」

…乗り切った。乗り切ったぞ俺ア…

デパートの中でもシロナに振り回され、カップルと勘違いした店員に絡まれ、悪乗りしたシロナがまた俺に抱きついて周りの男に睨まれたり…

それすらも乗り切った。今だけ自分で自分を誉めてえ…

その後は、シロナがなんやかんや言う前にさっさとポケモンセンターに行つて部屋を取り、ぐっすり寝た

シロナが「もっと遊びたかったのに…」とかぼやいてたが、今回はっからは無視する事にした

～翌日～

「…何故に？」

次の日、目が覚めるとシロナが俺のベッドに潜り込んでいた

とりあえず、シロナを起こさないようにベッドを出て着替えを済まし、ポケモンセンターに向いている食堂に向かう

その途中…

「あゝ！いたゞ！」

大声で俺を指差し、駆け足でこっちに来るシロナ

「起こしてくれたっていいじゃない！何で放っていくのよ！」

「いや、何か色々マズい気がしたから…」

具体的に言えば逆ギレ(?)したシロナに殴られそうなの…

そこからほぼ一方的にシロナが騒いでいると…

「君達、何を朝から騒いでいるんです？痴話喧嘩なら外でやってもらえますか？」

シロナの後ろから端正な顔に眼鏡をかけた男と、どこでパーマをミスったんだと言いたくなるアフロの男が来た

「痴話喧嘩じゃねえよ」

「何よ！あなたには関係…」

「えっ…?」

?シロナと眼鏡の動きが止まった?

アフロもなんか訳が分からないようでオロオロしてるし

「…ゴヨウ?」

「…シロナですか?」

「わー!ゴヨウだ!久しぶり〜」

「ええ、本当に久しぶりですね。半年振り位ですか?」

「そうね〜、あなたがポケモン貰って出て行った以来だから、それくらいね!」

どうやら昔からの知り合いらしく、話が盛り上がっている

因みに俺は基本的にスルーの姿勢で、アフロはポカーンとしている

…いや、眼鏡くん、お前騒ぎを収めに(シロナを止めに)来たんだよな?自分が一番騒いでるってどうだよ?

このままだと埒があかないので、俺は話を進めるために口を開いた

「…とりあえず、先に食堂行かねえ?」

「さっきは失礼しました。僕はゴヨウと言います」

「いや、こつちもアレの手綱を捌ききれなくてな…俺はケイジだ」

「オレはオーバだ！よろしくな！」

「私はシロナよ」

自己紹介した後に少し話をしてわかった事は…

・ゴヨウとシロナは幼なじみ

・ゴヨウとオーバで暫く旅をしている

・二人共バッジは五つ持っていて、それなりの実力者だと言つ事

この3つだ

にしても…

「何でシロナはゴヨウと旅に行かなかったんだ？」

ゴヨウがいたなら俺いらなくなかった？

「ケイジは私と旅するの嫌なの？」

「いや、そういう訳じゃねえが…ただ単に気になったただけだ」

「ふうん…理由は簡単よ。ゴヨウと旅なんかしたらずっとイジメられるもん！」

…イジメられる？

「イジメとは失礼な。僕は旅の間に退屈しないように他人で遊んでいるだけですよ」

これでもかつ！と言うくらい素敵スマイルで言い放つゴヨウ

…胡散臭え。…うわ、オーバが直立して泣いてるし…

「…オーバ？どうしたの？」

「…あれ？おかしいな…魂の汗が止まらないや」

…ガンバ（笑）

「それにしても…」

ゴヨウの眼鏡がキラリと光り、含みのある笑いを浮かべる

「シロナはそちらのケイジにご執心のようですねえ」

「なっ！？／＼／」

唐突にゴヨウがシロナをからかい始める

何となく予想していた俺とオーバは早くも我関せずの姿勢を取って

いる…美味しいなこの鮭

「いやいや、驚きましたよ。あのシロナにも遂に春が来ましたか」

「ち、違ってもん！確かにケイジは…その…格好いいと思うけど…
そんなんじゃないもん！」

「格好いいとは思ってるんですね？」

「うう…／＼／」

「いやはや…さっきの言葉も受け取り方を変えれば告白でしたしね
え…『私と旅するの嫌？』なんて言っちゃって…」

「うううううう…！／＼／」

「いやあ、熱い熱い。今夜は赤飯を頼まなければいけませんかね？」

「~~~~~！！ケイジも何か言い返してよ〜！」

そう言っただけの方を見るシロナだが…

「あ、オーバ。醤油取って」

「ほい、これか？」

「サンキュー」

「…って何で普通に食べてるのよ〜！」

いや、冷めるし

「やっぱ豆腐には醤油だな」

「いやいや、めんつゆも捨てがたいぜ？」

「何の話をしているのよ！裏切り者〜！」

もはや顔が可哀相なくらい真っ赤なシロナ。しかも若干涙目

…そんな顔をされたら…俺の、俺の…

スヒリッ
悪戯魂に火がつくじゃねえか！

「そんな事言いながら罰ゲームとか言っただけでここに着くまで俺の腕に抱きついてたの誰だっけな〜？」

「なあ！／／／」

「ほう…そんな事まで…」

「ち、違っの！ケイジが抱きついて欲しそうだったから…／／／」

ふっ…甘いぞシロナ…

「俺が離れてくれって言っても嫌とか言っただけで離れなかったのか？」

「あっ…／／／」

「ほ〜…これは本気で赤飯の準備が要りますかね…」

「うううううう…くくく！ケイジのバカアアアア！！」

そう言っつてシロナは叫びながら走って食堂を出て行った

「ケイジ…」

「ゴヨウ…」

俺とゴヨウは握手して…

「「ナイスゲーム！！」」

互いの健闘（？）をたたえた

「…悪魔が二人も…」

オーバがそんな事を言っていたが、今は機嫌が良いのでスルーした

「まあ、それは置いといて…あなたはシロナの気持ちに気づいていますか？」

「…？何の話だ？」

「はあ…（あそこまでからかっておいて無自覚ですか…これは先が長いですね…シロナ）」

「ため息！？何故に！？」

「何でもありませんよ。鈍感」

「アレ？何かさつきと態度が180。違う気がするんだけど？」

「…どうでもいいんですけど、早くシロナを追いかけた方がいいんじゃないですか？」

「大丈夫じゃね？その内機嫌直して出てくるだろ」

「（絶対出てきませんがね）」

そしてその後はトバリ観光に1日を費やした

その夜…

「お〜い、シロナ〜。いい加減機嫌直せ〜」

「…ケイジなんて知らないもん」

シロナが部屋に立てこもったせいで、部屋に入るのに四苦八苦したのは、また別の話…

何でこうなった…

初めてのジム戦！VSモモロー〜反省と後悔〜（前書き）

何だと…PSPの ボタンが動かないだと…？

…そういう訳で、空の軌跡の小説が進められないので、修理が終わるまで暫くこっちメインで更新します

P・S・現在クローネ砦のイベント中

初めてのジム戦！VSモモコ〜反省と後悔〜

「……………ん…」

朝か…

いつまでも寝ていても仕方ないのでベッドから起きようとしたが、
何か俺を押さえつけていて動けなかった

俺はその何かをのけようと顔を向けると…

「ふみゅ〜…」

「…何故に？」

さて、ここで問題です

朝、起きてみると、一緒に旅をしている女の子が自分のベッドに、
あまつさえ抱きついて寝ていたらどうしますか？

正解はこちらです

「何してんだボケコラアアアア！」

「痛アアアア！」

「…で？何で俺のベッドに入り込んだ？」

その後、シロナを叩き起こした俺はすぐさまシロナを正座させ、お説教モードに移行した

「何でって…私が一緒に寝たかったから」

「年を考えるアホ。ちっちゃい子かお前は！」

「む…別にいいじゃない。減る物でも無いんだし」

正座しているものの、全く反省していないシロナ

「減るんだよ！すり減ってたよ！主に俺の中の常識とか理性が！」

俺も一応健全な17歳の男ですから！(、(キリッ

つーかシロナと旅をして以来だんだん俺の常識が崩れている気はする
「はあ…ったく、今回は俺だったから良かったもの…相手が相手
なら襲われてんぞ」

「…ケイジなら別に襲われても…」

「あゝあゝ？」

「…めんなさい！」

少し怒るとすぐに謝るシロナ

「全く、女の子が軽々しくそんな事を言つもんじゃありません！」

「何でお母さん風？」

「そんな娘に育てた覚えはありませんよ！」

「まず育てられた覚えが無いんだけど」

だんだんと話がおかしくなつて行く気がしたので、途中で切り上げ、
朝ご飯を食べに食堂に向かった

〈食堂〉

「で、ゴヨウ達は今バツジ何個だ？」

ゴヨウ達とはさっき食堂の入り口で会った

「5個だぜ」

「後はナギサ、ミオ、ハクタイだけです。リーグ開催までまだ半年以上ありますからのんびり行くつもりです」

ほく、5つか。やるねく

「ふえく…もう5つも持つてるんだ…すごい！」

「まあな！」

シロナが素直に二人を褒めるとゴヨウは何時も通りに微笑み、オーバは尊大に胸を張る

「…ん？という事はもうこのジム戦は…？」

「ああ。終わってる」

「僕としてはすぐに街を出ても良かったのですが…オーバがどうしてもカジノに行きたいと駄々をこねるもので…」

どうやらゴヨウもパートナー絡みで苦労しているようだ

「そういうお前らはどうなんだよ？」

「え？あの…その…」

おお、めちゃくちゃテンパってる

まあ、まだ一個も持ってないとか言いたくないわな

「……まだ0個です」

「「へ？」」

「だ・か・ら！まだ0！ここで初めてなの！」

気の抜けた返事をするゴヨウ達に逆ギレするシロナ

今回ばかりはゴヨウも弄るのを忘れてポカンとしていた

「「……………ぷっ」」

しかし、とうとうこらえきれなくなったのか、吹き出してしまった

「~~~~！絶対すぐに追い抜くもん！」

「くくく……まあ、頑張つて……あはは……下さい……」

笑いながらシロナにそういうゴヨウ。オーバに至っては笑いすぎて腹を抱えている

「笑いすぎよ！」

「いえ……すみません。でもシロナにハクバがあが許すだけの大人っぽさが六年経つてもつかなかったんだと思うと……くくっ……」

「俺もその話は聞いてたから、つい……ははっ」

「む〜！もう私16だよ！子供じゃない！」

「だからその反応が子供っぽいんだよ」

「ケイジまで…（泣）…いいもん！すぐにバツジーつ目ゲットするんだから！」

そういうとシロナは俺を引きずってジムへと走っていった

…ん？俺を引きずって…？

「あー！俺の鮭雑炊！」

「いいから行くの！」

「雑炊〜（泣）」

抵抗虚しく、俺はシロナに引っ張られて行くのだった…

「たのも〜！」

「ヤマブキの道場じゃねえんだから…」

どごその道場破りのようにジムに入っていくシロナ。

そんなシロナを迎えたのは綺麗な桃色の長い髪を後ろで結った二十代くらいの女の人だった

「ようこそ、トバリジムへ。挑戦者の方ですね？」

「はい！シロナと言います！」

めちやくちゃ 元気よく挨拶するシロナ

「あらあら、元気がいいですね。私はこのジムのジムリーダーでモモコと申します」

そんなシロナを微笑ましく見て、自己紹介をするモモコさん

…なんと言うか、大人だ。シロナにもこれくらい大人っぽさがある方がいいのに

「…ケイジ？また何か失礼な事考えたでしょ？」

「イヤ、ソナナコトナイデスヨー」

危ない危ない、シロナの勘が異常に鋭いの忘れてた

「ふふ…仲がいいんですね。それで…お二人共ジム戦ですか？」

「いや、俺は「はい！そうです！」」

「やはりそうでしたか。ならば奥へどうぞ」

只の付き添いですが、と言いたかったのだが、シロナに遮られ、そのまま流されてしまった

シロナ…恐ろしい子…

「…こちらです」

連れていかれた場所は、そのまんまヤマブキの格闘道場だった

「それではどちらから戦いますか？」

「私から！」

シロナが勢いよく名乗り出る

「わかりました。それではルールを説明しますね。

使用ポケモンは一体。道具の使用はなしです。…それでは始めましょうか…行きなさい！エビワラー！」

「出番よ！フカマル！」

モモコさんが出したのは、格闘タイプのエビワラー。対するシロナはいつものようにフカマル

タイプのには五分。だが、レベルは明らかにシロナの方が低い

見ただけで分かるほど、纏っている雰囲気が違う

「っ……」

どうやらシロナにも相手の強さがわかったようで、かなり険しい表情をしている

「先攻は譲りますよ」

「…くっ、フカマル！砂嵐！」

フカマルが砂嵐を作り出し、その中に身を隠す

…作戦としては悪くないが…シロナにいつもの攻めの姿勢が無い

「ふむ…そう来ましたか…」

一転してモモコさんには余裕すら感じられる

「フカマル！隠れながらマッドショット！」

「かわしなさい」

あっさりと攻撃をかわされる

「フカマル！まだよ！切り裂く！」

フカマルが姿を現し、エビワラーに素早く接近する！

「…甘いですよ。エビワラー、カウンター」

「フカツ！？」

「フカマル！？」

切り裂くが決まったと思った瞬間、エビワラーが消え、フカマルが吹き飛ばされる

「フ…カ…フカ！」

しかしフカマルはまだ戦えるようで、すぐに立ち上がる

「もう一度砂嵐！」

再び砂嵐が吹き荒れる

そしてフカマルはまた砂嵐に身を隠す

「…同じ手にかかってあげるほど、私は優しくありませんよ？…エビワラー！決めます！心の目から爆裂パンチ！」

「……………エビー！」

「フカアー！」

「あっー！」

…心の目。次に出す技の命中率を100%にする技

そして心の目の後に威力は大きいが命中率の低い爆裂パンチ

何とも定番な組み合わせだが、その威力は大きい

それをエビワラーよりレベルが低いフカマルが耐えられるはずもな
く…

「フカマル戦闘不能！よって勝者、ジムリーダー！」

これが、シロナにとって初めての負けだった

「……………」

呆然とするシロナ。当然だ。コイツは負けを知らなかった。

いつも相手が味わっていたはずの気持ちだが、今は自分に向けられているのだから

「…あなたは確かに良いトレーナーよ」

モモコさんがシロナに近づいて話す

「でもね、どんなに良い作戦でも、どんなに凄い技でも、実力と経験がある人には二度は通じない。それが通るのは初心者か、何もわかってない人だけ。

…強くなりたいのなら、自分のポケモンを信じて、その場の状況についていく、追いついていく力を身に付けなさい」

そしてモモコさんはこっちを向いて

「あなたもやるの?」

と、最初の丁寧語はどこえやら、気さくに話しかけてくる

…いやあない。シロナの背中を押してやりますか

「やりますよ。ルールはさっきと同じですか?」

「ええ。じゃあ始めるわよ…行きなさい！サワムラー！」

「ガーデイ！」

モモコさんは今度はサワムラーを、俺はガーデイを出す

「…オイ、シロナ」

俺が呼びかけると、シロナは顔だけをこっちに向ける

シロナの目には、涙が浮かんでいて、こぼれ落ちないように必死に耐えていた

「今お前が考えてる事当ててやるのか？」

…『私がつとしっかりしていればフカマルは傷つかなかった。負けたのは私のせいだ』」

ビクリとシロナの肩が跳ね上がる。凶星だったようだ

「…それについては俺はどうこう言えない。お前が乗り切らないと意味が無いから。…だけど、一つだけ。一つだけ確かな事はある」

モモコさんが言うように、コイツは良いトレーナーだ。ポケモンが大好きだし、自分のポケモンは心から信頼している

だが、まだ未熟だ。言うならばダイヤの原石なのだ

原石は磨けば宝石と化す。ならば俺はその手伝いをしてやるつ

俺はシロナに、俺が今のシロナの状況を乗り切った時のキーワード

を教える

「…“反省と後悔は別だ”

反省は次に進むために、失敗を糧により高く飛ぶためにする事。後悔は失敗をただただ嘆く事だ
今のお前はどっちなんだ？」

暫く待つが、答えが返ってくる様子はない

「…後悔しか出来ないんなら、悪い事は言わない。“トレーナーをやめろ”。トレーナーをやめてカンナギに帰れ」

その言葉に、相当ショックを受けたのか、固まってしまっ

「…けど、後悔を止めて次を見れるのなら…このバトル、よく見とけ。ヒントくらいは見せてやるよ」

…さて、一丁派手にやりますか！

理由、涙、悲しみ、恋心？

Side Shirona

私は負けた

それも、全く手も足もでずに

一度も相手にダメージを与える事さえ出来ずに

私はただ、その場に立ち尽くす事しかできなかった

私は、初めて負けた

その事実だけが、重くのしかかっていた

どれくらい経ったんだろう

モモコさんがこっちに来て、アドバイスの事を言ってくれた

けど、今の私にはほとんど頭に入らなかった

…唯一頭に残っている言葉

“ポケモンを信じて…”

私はフカマルを信じてなかったの？

じゃあ…負けたのは私のせい？フカマルが傷ついたので私が信じてなかったから？

そんな考えが頭の中でグルグル回っていた

でも、その時、ケイジが話しかけてきて、私が考えていた事を全部当ててきた

しかもその後、「トレーナーをやめる」とまで言われた

…体が震えた。トレーナーをやめる事なんて、考えただけでも怖いでも、その時のケイジの言葉は、不思議と頭に残っていた

「けど、お前が次を見て前に進めるのなら…このバトル、しっかりと見とけ」

何故かはわからないけど、救われた気がした

私を見てくれている人がいる。ただそれだけで…心があったかくなつた

“反省と後悔は別”

乗り切るか、立ち止まるか。

きっとケイジは私にそんな事を言いたかったのかな？

「フカ…？」

ふと、下を見ると、抱っこしているフカマルが私を心配そうに見ていた

「うん。私は大丈夫。だから…ケイジをしつかり見ておこう？次、絶対負けなかったために」

「フカ！」

そう。負けても、次に勝てばいい。

そんな簡単な事を忘れていた

まだ、終われない。始まってすらいないから

まだ、私を見守ってくれる人がいるから

…そうでしょ？ケイジ

そう自分で結論付けた時、ケイジのバトルが始まった

「それでは、先攻は譲りますよ」

私の時と全く同じ事を言うモモコさん

今なら、あれが相手の出方をうかがっているのだとわかった

「ガーディ、火の粉」

「避けなさい」

ガーディが火の粉をサウムラーに飛ばすが、サウムラーは難なく避けていく

「噛みつけ！」

ガーディが突撃していく

無茶だ！、そう思った

「サウムラー、カウンター！」

「避ける！」

間一髪ガーディがカウンターをかわす

私がケイジに何であんな事をさせたのか、文句を言おうとすると

「わかったか？あれがさっきお前がフカマルにさせた事だ」

その言葉に口をつぐんでしまう

確かに、砂嵐が無いとはいえ、あれはさっき私が使った作戦だった

私はフカマルにあんな危ない事をさせてたんだ…

「…でもな、作戦としては悪くは無い。ただ、後一手が足りなかっただけだ」

「え？」

「…ガーディ！」

今度は火炎車で突っ込むガーディ

「サウムラー、避けてメガトンキック！」

サウムラーは火炎車を避け、メガトンキックを食らわそうとモーションに入るが

「吠える！」

「ガウツ！！！」

「!?!」

吠える攻撃に怯んでしまって、技が出せなかった

「火炎放射！」

「サウムラー！」

サウムラーは火炎放射に飲み込まれるが、辛うじて逃れ、ダメージは受けたものの、ガーディにメガトンキックを当てようとする

ガーディは技を放ったばかりで動けない

よけられない。そう思ったけど

「その場で火炎車！」

「!!!サウムラー、距離をとりなさい!」

炎を纏ったガーディを蹴れる訳もなく、そのまま離れるサウムラー

「まさか火炎車を防御に使うとは…」

「誰も攻撃技を防御に使ってはいけない…なんて言ってますんよ?」

「それもそうね…サウムラー!突撃よ!」

「ガーディ!火炎放射!」

火炎放射をかわしてどンドンガーディに接近する

そしてクロスレンジに持ち込んで

「起死回生!」

そのままガーディに起死回生がヒットした

吹き飛ばされたガーディはピクリとも動かない

「ガーディ戦闘不…フレアドライブ!」

審判の声を遮ってケイジが叫んだが、ガーディはピクリとも…!?

ガーディがない!?

「!?!?」

「サウムラー!?」

突然どこからか現れたガーディがサウムラーを吹き飛ばした

サウムラーはそのまま目を回し、倒れた

「さ、サウムラー戦闘不能! よって勝者、チャレンジャー!」

「…勝っちゃった」

しかも一度もダメージを貰わずに

…私の時とは真逆

それもショックだったけど、何よりケイジと距離が開いてしまって気がした

「作戦も、要はタイミングと対応なんだ」

バッジをもらったケイジが、私の前に立つ

「どんなに凄い作戦でも、相手に見破られて、逆転される時もある。その時に対応できた方の勝ちなんだよ。さっきシロナはその対応ができなかった。モモコさんがその場で判断しろって言ったのは、そういう理由だ」

「…うん」

少し、声がうわずってしまふ。何かはよくわからないけど、さっき

引っ込んだはずの涙がまた出てきそうだった

「…ほら、そんな顔すんな。まだ一回負けただけだ。負けても死ぬ訳じゃないだろ？次、頑張ればそれでいいじゃねえか」

「…そうだね」

私を慰めようとしているのか、いつもよりよく喋るケイジ

そんな彼に余計な心配をかけたくなかったから、無理矢理笑顔を作
って微笑んだ

上手く笑えた、はず

「…立ち直った所で、すぐに特訓…と行きたい所だが…一旦帰る
か」

「私なら大丈夫だよ？」

「…疲れつてのは自分でもわからない所で溜まってるもんなんだよ。
ほれ、先に帰ってる。すぐに追いつくから」

「ケイジは、どうするの？」

「デパートでボール買ってから帰る」

「わかった」

私はそのまま大人しくケイジの言う事に従った

…今日は、何もしたくないな…

（side keiji）

「あいつ…まだ引きずってやがるな」

あのアホは上手く隠せたと思ってるみたいだが、引きずってるのが
まるわかりだ

ああいう根が素直な奴は思ってる事が顔にでるからな

「…すみません。引き止めてしまっ…」

「いえ、大丈夫ですよ」

そう。俺が残った理由はモモコさんに引き止められたから

まあ、話の内容は大体わかってるが

「ケイジさん…いえ、

チャンピオンと呼んだ方がよろしいですか？」

「好きな方でいいですよ」

「にしても驚きました。まさかシンオウにカントー・ジヨウトチャ
ンピオンがいらっしやるとは……」

「あはは……」

肩書き聞いて騒がれたくないしな

「それはともかく……ありがとございます」

「へ？」

突然お礼を言われて唖然とするモモコさん。

あ、ちよつと面白いかもしんない

「シロナに負けを教えてくださいました事、ですよ」

「え？……ああ、そういう事ですか」

納得したように拳を手のひらにポンと乗せる

……何だろう。リアクションに年の差を感じる

「……今失礼な事、考えていましたね？」

「ソナナシツレイナ」

…女って、怖い

「まあ…本当に感謝してます。あいつがこれで勝ってたら、とりあえず俺がボコボコに負かそうと考えてましたから」

「それは…まあ、あはは…（シロナさん…今回だけは負けて正解かもしれませんか…）」

…？モモコさんが遠い目をして苦笑してるが…何かあったのか？

「…あの子は、立ち直れますかね？」

暫くして不意にそんな質問をしてきた

…愚問だな

「あの子にはおそらくかなりの才能が眠っている。それも、私では到底かなわないほどの才能が。」

…戦ってみて、思わずそう思いました」

この人の目を見て、改めて良い人だと思った

純粹にシロナの心配をしている。目を見ればそうわかった

「立ち直らせます。何があっても、俺が、必ず。」

そう言っただけ俺は背中を向けて歩き出した

「…頼みましたよ？」

後ろからそんな声が聞こえた

返事はしない。別の返事の仕方を、俺もあの人も望んでいるから

…さて、帰ったらアフターケアはいるかな？

side out

「…はあ」

私はポケモンセンターに戻るとすぐにベッドに飛び込んだ

…ケイジの布団だったけど、知らずに飛び込んだじゃったから仕方ないよね？

「…負けちゃった」

言葉に出すと、改めて負けたんだと自覚した

枕をぎゅっと抱きしめる

そのまま顔に押し当てて座り込むと、ちよつと落ち着いていた

「……………」

ケイジ、何してるんだろ

そんな事を考える

すると

「悪いな。ちょっと遅れた…」

「あ…お帰り」

「……………」

帰ってくるなり固まっているケイジ。…私何かしたかな？

「…何してるんだ？」

「え？」

「自分の今の状態見てみる」

自分の状態？

…布団の上で枕を抱きしめて、顔に当ててる

…何もおかしくないよね？

「…もう一回言っぞ？ “俺の”ベッドで何してる？」

「だから、ケイジのベッドで……………」

…ん？ケイジのベッド？…！…！

「／／／／」

「…変態」

「ち、違う!」

「…安心しろ。誰にも言わないから。」

「…だから俺の半径1m以内に入らないでくれ」

「だから!違うのよ〜〜!!!／／／」

凄い生暖かい目で私を見るケイジ

違うもん!私にそんな趣味なんか無いもん!／／／

「…プツ」

「?／／／」

「あはははは!」

突然笑い出したケイジ

それに文句を言おうとすると…

「何だ、普通じゃねえか」

「え…?」

一瞬、頭が働かなくてポカンとしちゃったけど、すぐにケイジが言った意味がわかった

心配してくれたのだ。彼は

自分が勝った事を喜ぶより、私の心配をしてくれた

それが、今まで感じた事がないくらい嬉しかった

「オイオイ、何でそこで泣くんだよ」

「え？…」

ケイジの言葉に、自分の目に触れて見ると、確かに泣いていた

「あれ…？おかしいな…？」

拭いても拭いても、涙は止まらない。どれだけ念じても、涙は止ま
つてくれなかった

「何で…？止まらないの…？」

必死に、止まらない涙を止めようとしていると、突然何か暖かいモ
ノに包まれた

「…無理、すんな」

ケイジが、私を抱きしめていた

「ケイジ…？」

「泣きたい時に我慢しても辛いだけだ…」

けどな、いつも泣きたい時に泣ける訳じゃない。だから…

泣ける時に思いっきり泣いとけ」

「…いいの？」

「見てわかるだろ？」

「…いっぱい泣いちゃうよ？汚れるよ？」

「しつこい。良いって言ってんだろっが」

そこが、私の我慢の限界だった

「…ふえ」

もう抑えられなかった。

「うわあああああ！！」

「……………」

ケイジは何を言うでもなく、ただ私の背中をさすってくれていた

私は、その日、全てをケイジに吐き出した

あの不思議と安心する暖かさと、確かに感じた優しさに

全てを出し切るまで泣き続けた

…今なら、自分の気持ちがわかる

何故、ケイジが側にいると安心するのか

何故、ケイジが他の女の子と話していると悲しくなるのか

何故、ケイジと話していると楽しいのか

…何故、ケイジと旅をしていると幸せなのか

ああ。私…

ケイジが好きだったんだ

修行〜修行？特訓？…イジメ？〜（前書き）

今回は短めです

バイトが忙しくなってきた今日この頃…

修行〜修行？特訓？…イジメ？

Side Shirona

「ガバイト！ドラゴンクロー！」

「ガアア！」

「〜」

ジム戦に負けてから、早一週間

あれから、ケイジ達監修の特訓メニューをしているんだけど…

「どろかけからマッドショット！」

「ピカピカ」

「今よ！ドラゴンクロー！…え？身代わり！？」

「ピ〜カチュウ」

未だにケイジのピカに遊ばれてます…

〜一週間前〜

「…落ち着いたか？」

「…うん」

泣いてた時は気付かなかったけど…凄く恥ずかしい事しちゃったんだよね…

ケイジに抱きついて大泣きするなんて…／／

「…で、どうすんだ？」

「え？」

「リベンジするんだろ？」

「うん」

「だったら特訓するだろ？俺はまあ手伝っけど…ゴヨウ達にも頼むか？」

「それは…」

確かにゴヨウ達もいた方がいい特訓になる…とは思っ

けどなあ…“あの”ゴヨウだし…

オーバはまだいい。なんか大丈夫な気がする

でもゴヨウは…ない

嬉々として特訓という名目でイジメられるのが目に見えている

「…ゴヨウ達は、いいや」

「そうか？じゃあ早速明日からやるか」

「うん！よろしく願います！」

「ふ…任せる」

この時、私はまだ気付いていなかった

ケイジがゴヨウ以上のドSだったなんて…

〈特訓1日目〉

「いいか？まずは自分がどこまで臨機応変に指示できるかの把握からだ」

「うん」

「とりあえずお前はフカマルを指示して俺のピカの攻撃に対応しろ。勿論そっちから攻撃してもいいぞ？」

「わかった！」

ケイジがまず私に指示したのは、対応力と把握力の強化だった

何でもそれがあるか無いかでだいぶ違うらしい

私には、まだ把握力はあるけど、対応力が全然足りないんだそうだ

「じゃあ、頑張れ」

「あれ？特訓するんじゃないの？」

言うだけ言ってどこかに行こうとするケイジ

ケイジがいないとピカを指示する人いなくなっちゃっよ？

「いや、ピカは自分の判断で動くんだけど？」

「え？嘘っ！？」

そんなの、すぐに勝てちゃうんじゃないっ…

「大丈夫？って顔してんな…まあ、一回戦ってみろ」

「わかったよ」

とりあえず私はフカマルを出して、戦う体制に入る

「ピカ、今は思いつきりやっついていいぞ？」

「ピカ」

「行くよフカマル！」

「フカ！」

「じゃあ…始め！」

ケイジの合図で、とりあえず砂嵐を出そうとフカマルに指示しようとした時だった

「ピカッ！」

「フカアア！！！」

「へ？」

私が指示を出す前にピカの電光石火　かわらわり　アイアンテールの3コンボが決まっていた

そんな連続攻撃にフカマルが耐えられるはずがなく、目を回してのびてしまっていた

「…（ポカーン）」

「わかったか？目標はこのスピードに対応する事だ。
…始めは手加減させるがな」

「ハ…ハイ…」

その後、五回フカマルでピカと戦ったんだけど、ボコボコにされま
した…

く元に戻って

「ガバイトはどろかけ！リオルはポーンラッシュ！」

「ガアア！」

「リオ！」

今はケイジの指示で二対一で戦ってます

でも…

「ピカピカ〜」

《甘い甘い、だそうですよ》

ピカに物凄い軽〜くよけられてる

隣でイブがピカの言っている事を通訳してくれてるんだけど…思っ
てたよりピカは腹黒いんだよ…

「ガバイト！砂嵐してから穴を掘る！リオルは電光石火からはっけ
い、ボンラッシュユ！」

「ピカ〜」

…その余裕を今日こそ崩してやる〜！

「リオル！思いつきはっけい！」

「リオ！」

「ピカッ!?!」

ここで思いつきはっけいをされるとは予想していなかったのか、
簡単に弾かれる

よし！狙い通り！

「ガバイト！出てきてドラゴンクロー！」

「グオオ！！！」

「ピカチュー！？」

穴を掘るで態勢が崩れたピカの後ろから出てくるガバイト

そのままピカにドラゴンクローがクリーンヒットし、ピカは吹き飛んだ

流石にドラゴンクローが直撃したら、ピカだって…

《…確かに、今のはなかなかいい作戦でしたね》

「えへへ…ありがとう」

イブが珍しく褒めてくれたので、素直に喜ぶ

《…でも、詰めが甘かったですね》

「え？」

イブがそう言った瞬間、上空から二つの閃光がガバイトとリオルを貫いた

「ピカ、ピカチュー！」

《そう簡単に負けてたまるか！、だそうですね？シロナ》

「嘘……」

確かにドラゴンクローは直撃したはず……まさか！

「またやられた……」

「ピカピカ！」

《何回同じ手に引っかかるの？、だそうですね》

また身代わり……

私はこれに五回以上引っかかってる

「も〜！いつになったらピカに勝てるのよ〜！！」

「ピカピカピカ〜」

《いつだろね〜、と言ってます》

ケイジ、お願いだからピカに手加減を教えてあげて……（泣）

再戦〜私刑 混沌〜（前書き）

どうも！黒です

今回若干やりすぎた感が…

まあいいやって方はどうぞ！

再戦〜私刑 混沌〜

「行くわよ！みんな！」

「…つつても二人だけだな」

「気分よ！」

「……………」

あれから二週間。ようやくケイジのお許しが出ました！

…結局ピカには遊ばれてたままだったんだけど…

でも！フカマルはガバイトに進化したし、リオルも凄く強くなった

次は絶対に負けない

「たのも〜！」

「だから…もういいや」

何かケイジが疲れてるけど…何かあったのかな？

「…お待ちしていましたよ」

「あ、お久しぶりです！モモコさん！」

奥から大人な雰囲気で見れるモモコさん

「ええ、お久しぶりです。…今日は再戦ですか？」

「はい！」

「そうですか…なら、こちらに」

前に来た時のように、奥の道場に案内される

「ルールは前と同じ…使用ポケモンは一匹ずつ、道具の使用は無し。それでよろしいですね？」

「（コクリ）」

「では始めましょう…行きなさい！カポエラー！」

「頼んだわよ！ガバイト！」

相手はカポエラー。私はガバイト。相性的には五分

…前と全く同じ状況

「…なるほど。フカマルから進化しましたか…少しは特訓したようですね」

「それはもう。あなたに勝つために頑張りましたよ。私もガバイトも、出してないけどリオルも」

…思い出したらちよっとだけ涙出てきた

「…どうしたんですか？」

モモコさんが突然泣き出した私を心配してか、声を掛けてくれる

「気にしないで下さい。…ちょっと特訓を思い出しただけですから」

「はあ…？（ケイジさん…どんな特訓したんでしょうか？）」

大変だったなあ…ピカに遊ばれたり、ピカにボコボコにされたり、ピカがふざけて逃げたのをケイジに捕まえさせられたり…

「…ピカのバカヤロー！！（泣）」

「ピカって何！？というか八つ当たり！？」

「そんなのどうでもいいです！もうさっさとくたばって下さい！」

「そんな理不尽な！？」

今までのストレス、全部発散してやる！

「ピカ…お前一体どんなやり方で戦ったんだ？」

「ピカピカ？」

《…知らぬが仏って言葉、知ってます？》

「いや、知ってるが…あの温厚（天然）なシロナがあそこまでキレるって…」

《父様…この世には知らない方がいい事があるんですよ…》

「ピカ〜」

「もういいや…」

二人が戦っている横でめちやくちや達観していたケイジがいたとかいなかったとか…

「ガバイト！砂嵐！そこから穴を掘る！」

「…！（戦術的には前と同じ…けど、付いてくるモノが違う…どこから来る…？後ろ？いや、逆について真正面…？いや…）」

「ドラゴンクロー！」

「えっ!?!」

「グオオ!!」

「カポエツ!?!」

ドラゴンクローがカポエラーにヒットする

「(どんな人でも一度突撃して痛い目に遭ったら次に同じ事するのを躊躇うのに…まさかそれを逆手に取られるなんて…)」

「よっし！仕返し成功！」

「は？仕返し？」

何故かめちゃくちゃ驚いてるモモコさん

「え？今の作戦なんじゃ…」

モモコさんがこう言った後、道場に笑い声が響いた

「アツハツハツハツハ！コイツがそんな大層な事考えてるわけねーっすよ！どうせ今のも前に通じなかったのが悔しかったからですよ！」

「…まあ、そうなんだけど」

なんかケイジの言い方、気に入らない…

「あは、あはははは！」

「む…モモコさんまで！」

二人共ひどいよ！

…でも、モモコさんが笑ってたのは、別の理由だった

「あはははは！…だって…今のでカポエラーが目エ回してんだもん

「！」

「「……………はい？」」

言われてからガバイトとカポエラーの方を見ると、確かにカポエラーが目を回してのびていた

「…あれ？」

「…ピカ？お前…」

「ピカ〜？」

《おつかしいな〜、と言ってますが？》

「やりすぎだ。バカ」

「あなたの勝ちよ。シロナ」

「え？あ…はい」

何だろう…全く勝った気がしない…

私はモモコさんにバッジを貰ったものの、しばらくその場で首を傾げる事しか出来なかった

「それにしても…流石に一撃KOは…自信無くすわね…」

「へ…それは…あの……………ごめんなさい…」

「え？」

このタイミングで!?

「そうよ。もっとこう…何でだとか娘いたのとか、ジムリーダー交代!?とか…」

「あ、いいです。そろそろあなたの性格わかってきたんで」

…ケイジ、そろそろ面倒になってきたんだね

「い〜じゃない。ちょっとくらい乗ってくれたって」

「いいです。むしろ嫌です」

「言い切った!?!」

「ぶ〜ぶ〜」

「その前にモモコさん、あなたそんな性格と喋り方でしたっけ!?!」

「ケースバイケースよ」

もうやだ!何この混沌カオス…

結局それから私達が解放された時にはもう夕方になっていた…

祭り〜ゴヨウの策謀?〜前編(前書き)

初の前中後の3部作です

半分は作者の悪ふざけで出来ています(笑)

祭り〜ゴヨウの策謀?〜前編

「ねえ〜、いいじゃない。遊ぼーよ」

「いや、連れ待ってるから…」

「すみません。そういう訳で諦めてもらえませんか？」

「ええ〜でもお〜…」

「」(…ウゼえ)」

「…よし、しょうがねえな。ここは俺が…」「お呼びじゃねえんだよクソアフロが」(…泣)」

はい、どーも。お久しぶりです。ケイジです

今現在進行形でゴヨウと女の子に絡まれているとです

切欠は簡単だった…

「お祭りに行こう!」

「……………は?」

いつもの事だが唐突だなコイツは

「いや、だからお祭りに行こう！」

…めっちゃくちゃ目がキラキラしてるな

「…面倒くさ」「ケイジこの前モモコさんに勝てたら何でも一個お願い聞いてくれるって言ったよね？」…わーっただよ

確かにそんな約束無理矢理させられたが…

「じゃあ今日の夕方にデパート前で待ち合わせね（やった！デートデート モモコさんにアレ借りないと！）」

「わかった」

…まあ、せっかくの祭りだ。派手に楽しみますか！

…てな訳でデパート前で待ってたら、ゴヨウとオーバに偶然会った
どうやら二人も祭りに行くらしいので、どうせなら一緒になって事になった

んで、シロナを待ってたら、知らん間にゴヨウに女の子が絡んで来た

…以上！

「ケイジ、何か全部僕のせいにしてませんか？」

「…いや、別に？」

コイツも心読める人種かよ

「別に、というのは気になりますが…ほぼあなたのせいですからね？」

「はい？」

んなアホな。俺みたいな普通メンがモテる訳ないだろ

「（…この様子だと本当に気付いてませんね。シロナもかわいそうに…」

…ちょっとくらいなら手助けしてあげましようかね？」

「ゴヨウ？」

「…ああ、すみません。用事を思い出しました。オーバ、行きますよっ。」

「え？俺も？なんd…」行きまますよ？」「イエス！ボス！」

「オイ！逃げるな！」

俺を生け贄にする気か！

「…」

「無視！？せめて助けてから行けよ！」

「チツ…ああ、ケイジには彼女がいるのでそういう誘いは無駄ですよ?。」

「「ええ〜!」」

「は?ちよつと待てゴヨウ!俺は」(合わせて下さい。こつでもしないとこの類の人間は諦めません)「(…了解)」

彼女なんていない、と言いかけると、ゴヨウが口を塞いで小さな声でそう言った

自分でどうにもできるか気がしなかったから、そのまま合わせる

「そういう訳だ。悪いな」

「なんだよ〜、彼女持ちかよ。ふざけんなよな〜」

「ホントホント」

…勝手に勘違いして、絡んで来たのはどっちだよ。クソアマガ

「ケイジ、何と言うか黒いオーラが出てますよ?」

…おっと。無意識にイラついてたみたいだ。

向こうが怯えてるが自業自得って事で

そんな事をしてると…

「ケイジ〜!お待たせ〜!」

シロナが走ってきた…浴衣で

「何故に浴衣!？」

「えへへ、モモコさんに古いやつ貸して貰ったんだ」

「なるほど」

だからわざわざ待ち合わせにしたのか…

そんな風にシロナと話しているところ…

「ねえねえ、誰？その子」

さっきの馬鹿共が懲りずに絡んで来た

「ん？コイツは…《ケイジ》」

突然ゴヨウがテレパシーを送ってくる

…あいついつの間にフワンテ出したんだ？

《さっきの計画を実行しますよ。都合良くシロナも来た事ですし》

「（…シロナが合わせられると思うか？）」

バトルの時以外年から年中頭の中がお花畑だぞ。アイツは

《合わせさせます。ですので僕の指示に従って下さい》

「(…わかった。ある程度は従う)」

《…まあいいでしょう。ちょっと待ってて下さい》

そこでテレパシーが切れる

…シロナに話を聞いた限り、アイツに全部任せんのは不安なんだよな…

↳side Shirona

浴衣をモモコさんに借りて、着付けして貰ってたら凄く時間がかかった

だから急いで待ち合わせ場所のデパートに来ただけど…何かややこしい事になってるっぽい

ケイジの顔を見たらすぐにわかった

それで、すぐにケイジの近くにいた女の子がケイジに私が誰か聞いていて、ケイジが適当にあしらっている時に…

《シロナ、ちょっといいですか?》

…ゴヨウからテレパシーが来た

「(…何?)」

とりあえず警戒しておく。昔からゴヨウに関してはどれだけ警戒し

ても警戒しすぎという事はなかった

《そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ。今ケイジが女の子に絡まれて困っているのは見てわかりますね？》

「（うん）」

《それで、ケイジと画策して、僕は用事がある、ケイジは彼女を待っている、という設定で逃げようと思いました》

「（へ）。それで、逃げられそうなの？」

《逃げられそうな時にあなたがノコノコ来たんですよ。なので…あなたにやって貰いたい事があります》

…ゴヨウがお願い？

………

嫌な予感しかない…

《ああ、大丈夫ですよ。あなたにとってもおいしい話ですから》

「（…あんまり信用できないんだけど）」

《おや？失礼ですね…》

今までの行いを考えなさいよ

《まあ、あなたに拒否権なんか無いんですけどね》

じゃあ始めから聞かないでよ！

…そう言いたいけど、後の事考えたら言えない

《それでやって貰いたい事とはですね…ケイジの恋人役です！》

「（何やて！…はっ！？）」

何か関西弁で喋っちゃった

《ネタに走るのも程ほどに。…まあ、あなたにとっては願ったり叶ったりでしょう？》

「（……………うう／＼／）」

その通り、なんだけど…恥ずかしい…／＼／

《ほら、素直になりなさい。僕に隠し事をしようなんて一万年と二千年早いんですよ》

「（ゴヨウもネタに走らない！色々危ないから！）」

《それは兎も角、…好きなんでしょう？ケイジが》

「（…よくわかったね）」

《何年幼なじみやってると思ってます？まあ、今日一日はセッティングしてあげます。せいぜい頑張りなさい》

「（ありがと。ゴヨウが初めて優しいと思ったよ）」

《失礼な。僕はいつでも優しいですよ》

「（はいはい）」

今回はゴヨウに感謝、かな？

side out

《ケイジ》

「（ああ、どうだった？）」

馬鹿共を適当にあしらっていると、ゴヨウからのテレパシーが入った

《シロナは協力してくれるようです》

「（そうか。じゃあパツパと逃げますか）」

《はい。しかし…》

やけに歯切れが悪いゴヨウ

「（なんだ？）」

《こういう類の馬鹿は案外しつこいです。ですから今日一日はシロナと恋人役を続けた方がいいでしょう…なんなら本当に付き合っても構いませんよ？》

「（考えとく。サンキューな、ゴヨウ）」

《いえいえ。では僕達も逃げますので》

「（ああ。またな）」

今回はゴヨウのおかげで助かったな

…なんか裏がある気もするがな

「ふふふ…二人共甘いですねえ…」

こんな面白そうな事、僕が見逃す筈無いじゃないですかあ」

「よねえ…ふふふ」

「よろしくお願ひしますよ？…モモ」さん」

「んふふ　まっかせなさい」

「…ドンマイ。ケイジ、シロナ」

…ケイジの予感は的中していた

祭り〜ドキッ 仕掛けだらけの大肝試し大会〜中編（前書き）

甘え…何だこの茶番…

はい！中編です

このままじゃ後編長くなりそうだな…

祭り〜ドキッ 仕掛けだらけの大肝試し大会〜中編

前回のあらすじ〜

女の子に絡まれる ゴヨウの手助けで逃げる

「……………」

「……………」

皆さんこんばんは！シロナです！

今はケイジに絡んでいた女の子達から逃げて普通に道を歩いているんだけど…

「……………」

「……………」

すっすっしく気まずいです…

お願いだから何か喋ってよ…

「…シロナ？」

「わひゃいー!？」

「?どうしたんだ?」

「な、何でもない!何でもないよ!」

「…ふうん」

うう…何か恥ずかしい…

「そ、それより!何か言いかけてたんじゃないの?」

「…ああ、とりあえず…」

良かった…なんとか話はそらせ…

「…手でも繋ぐか?」

ピシッ

その言葉を聞いた瞬間、私は文字通り固まった

…え?今この人なんて言ったの?手を繋ぐ?…手って…手?アレ?手を繋ぐってアレだよな?よくドラマとかで恋人同士がするアレだよな?でも私達はまだ付き合って…まだって何よ!…いや、でもこんなおいしい話は…アレ?ケイジなんて言ったんだっけ…

…正直、この時の私は見てられない程テンパってたと思う

「…シロナ?」

ボンッ！ シロナがオーバーヒートした音

「うきゅ〜……」パタッ

「ちょ！？シロナ！？シロナー！ー！？」

「………きろ」

何よ〜…もうちょっと寝かせてくれても…

「起きろー！」

「ひゃうっ！？」

ケイジにデコピンされた…地味に痛い…

といつか…

「……どっ？」

「祭りの会場だ。ったく、何かは知らんが突然オーバーヒートしやがって…」

…そうだった。突然手を繋ぐかなんて言われたからテンパってオー

バーヒートしたんだっけ

「ゴメンゴメン。じゃあ、とりあえず行くつよ」

「（…本っ当にマイペースだなオイ）」

「ケイジ？」

「…そうだな。行くか」

「うん」

ケイジが腕（本人的には手）を出してくれたので、遠慮なくその腕に抱きつく

「…オイ」

…ヤバ…青筋立ってるし…

「いいじゃない」

「…ハア。もう勝手にしてくれ…（腕に何か柔らかいモノが…）」

シロナの「ごまかす攻撃！

ケイジは諦めた！理性との闘いを強いられた！

「勝手にしまゝす」

「…ぶっ」

シロナの無垢な笑顔に思わず微笑むケイジ

第三者から見れば、アレ？あそこだけ別空間じゃね？てなものである

「早く屋台回ろーよ！屋台！」

「ちょ…わかった。わかったから引つ張んなって…」

「は〜や〜く〜！屋台全制覇するんだから〜！」

「貧乏旅なんだから自重しろよ？」

「うん！全部一回ずつにするから大丈夫」

「（…次の街まで保つか？コレ…）」

「一つしか年が変わらない癖に精神年齢がかなり違う二人

そしてケイジが旅費の心配をしていると…

「すいませ〜ん」

「…？」

「はい？」

なんというか…いかにも怪しい作業服を着た人が近づいて来た

「そのの二人カップルですよね？いや、カップルですね？」

「いや、その、あの…／／／」

「フーか何故確定？」

そこですぐに違うと言わなかったのが間違いだった

「いや、今年のメインイベントでカップル限定の肝試しをやってまして…」

「メインイベントで対象者を限定すんなよ…」

「…実は予想以上に祭りにいらっしやるカップルの方が少なくて困ってたんですよ」

「無視か」

「という訳で二名様ご案内」

そしてなんやかんやで強引に連れていかれた…

「ここでお待ち下さい」

ボタン

連れてこられた控え室にはすでに八組のカップルがいた

「なんか…」

「場違いだね…」

だって全部が全部ひっついてるもん

「…まあ、ここまで来ちまったもんはしょうがない。さっさと終わらせて祭りに戻るぞ」

「……うん」

大丈夫かな…私怖いの苦手なんだけど…

side Goyou

「ゴヨウ。計画通りケイジとシロナを連れて来たぜ」

「ご苦労様です。さて、これでは…フフフフ…」

「（あくどい顔してんな…）」

ガチャ

「あ、ゴヨウくん。こっちも準備できたわよ」

部屋から外に出ると、トバリの人とモモコさんがメイクまで終えて待っていた

「そうですか…では始めましょうか？」

「了解…さて、」

モモコさんは一息つくつと

「野郎どもー！モテてる奴が憎いかー！」

『ウオオオオオオ！！』

「だったらこの肝試し…いや、聖戦でチャラ男の軟弱な本性を露わにしてやれ！彼女に愛想を尽かさせる！」

『じゃあああああ！！』

「行くぞ野郎ども！気合いを入れるオオオ！」

『オオオオオオオ！！』

今ここに、モテない男達+ による聖戦が始まった

side out

『…ギヤアアアア！……』

「ビクウ」

「そんなビビらなくても…」

正直、ちょっと軽く見てた

だって先に行った全部のペアが悲鳴上げてるんだもん…

しかも次私達だし…

『次の方〜どうぞお進み下さい』

……来たあ

S i d e K e i j i

シロナのビクつき方が凄い

顔面蒼白で体がかなり震えてる

そんな怖いんだったら止めればいいのに…

「シロナ？止めとくんだったら今だぞ？」

「…行く」

「本気か？」

「行くったら行くの!」

と、本人が言い張ったので結局行く事になったんだが…

「…（ギユウ）」プルプル

「…何でこうなった？」

開始十歩でシロナがエマーゼンシーです

「あゝ…大丈夫か？」

「……………の」

「え？」

「怖い…ダメなお…」（半泣きで顔真っ赤＋涙目）

「!?!?!?!」

ヤベエ…一瞬持っつかれそうになった…何だこの可愛い生き物…（ケイジ君は小動物大好きです）

「…そんな怖いんだったら俺の服か手を掴んでろ」

俺が正面にあったコンニャクを払いのけながら言うと、シロナは無言で腕に抱きついて来た

…誰もそこまでしていいとは言ってねえんだが…

一方その頃…

「くっ…何だあの男！アイテムトラップが全く効かねえ！」

「隊長！火の玉&カツラトラップが突破されました！」

「クソっ！奴らは化け物か!？」

「お言葉ですが隊長！おにやのこの方は物凄いビビってます！そういう意味では成功です！」

「バカヤロー！おにやのこがいくらビビっても男がビビらなきゃ意味がねえだろ！男前に見えるだけだ！」

「ぐばあ!?!まさかそんな罠が…」

「恐るべし肝試し…いやさ、今のペアの男…！」

「くう…もはや打つ手なしか…?」

「…慌ててはなりません」

「」「提督!!(ゴヨウ)」「」

「まだ帰りの人式トラップがあります…付け入る隙があるならばそこでしょう…」

「し、しかし提督…」

「しかし何もありません！あなた達のチャラ男に対する怨念はその程度だったのですか!？」

「…提督の言う通りよ」

「」「皇帝!?(モモコ)」「」

「総員準備にかかりなさい…奴に一泡吹かせるわよ!」

『イエス!マイロード!』

馬鹿ばかりだった

「…ゴヨウ…こんなキャラだったのか…」

地味に常識人なオーバの眩きは、宙に消えて行った…

祭り〜最後の囃は冷たいアイツ〜

〜前回のあらすじ〜

シロナがエマーゼンシーです

…後、馬鹿がいっぱいです

〜sideEIIIIV〜

『うがあああ！！』

『キャアアアア！！』

『…ッラ、ずれてんぞ？』

『え？マジで？』

「提督！皇帝！Cの6地点も突破されました！残り4地点です！後
女の子の方は凄く可愛いです！！」

「くっ…敵軍は化け物か!?…軍曹、俺も思った!さあ、みんな!心の内を叫ぼう!」

『『『『萌え~~~~~!!!!』』』』

…やっぱり馬鹿ばかりだった

「最後のトラップにアレを置きなさい!ケイジの心拍数は!??」

「開始時から1つも変化ありません!アレは確実に自分が見たものしか信じない人種です!」

「ゴヨウくん、どうするの?これじゃあケイジくん達…いや、ケイジくんは無傷よ?」

「そうですね…」

そう、今回の僕ら(ゴヨウとモモコのみ)の目的は“ケイジの慌てた姿を見る事”

まあ実際は慌てるどころかお化け側のミスを指摘するくらい落ち着いてますけどね

…どないせえっちゅーねん

「提督!この7地点も突破!敵の勢いが止まりません!後女の子ごちそうさまです!可愛いです!」

そしてほぼ全員がシロナにオトされました。無理もありません。幼

なじみの僕でさえ危つくもっていかれそうでしたから

「…モモコさん。もう手は一つしかありません」

「…手はあるのね？」

「はい。今から言うモノをゴール地点に置いて下さい」

正攻法で無理なら邪道で行くしかありませんよね

く side ケイジく

「キヤアアアア！！？」

「落ち着けて。ただのコンニャクだろ」

「うづうづ………（泣）」

さつきからずっとこれの繰り返しです

「もうやだあ…ねえケイジ、帰ろ…？」（涙目＋上目遣い＋顔真っ赤＋涙声＋腕に全力でしがみついている）

「今から戻るより進んだ方が早く終わるぞ？それとももう一回怖い思いして帰るか？」

「ゴヨウくん……」

「モモ」さん……」

「計画通り」「（ニヤリ）

後日、シロナの怯えた写真が高値で取引されたらしい（オーバ談）

「……今回オレ空気じゃね？」

「アレ？オーバいたんですか？」

「ジーザス！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4753r/>

ポケットモンスターGLORIOUS TRACK

2011年12月11日21時49分発行